

## 1994年度第1学年第4回全体学習・全体授業の記録（板野中学校1年全体）

主 題 「誇りうる生き方を求めて」

1994年10月26日（木）

資 料 「ふるさと」（丸岡忠雄）

授業者 森 口 健 司

T 1: 1年A組で語られた思いを1年生全体で深めていきたいと思います。みんなは「ふるさと」の詩と板野町を重ねて、また家族のことを重ねて、A組の仲間がその思いを語ってくれました。腹の底にぐっときた言葉もあったし、みんなの中にも自分と同じだと思ふことがあったと思います。みんなでこの時間、この詩に寄せる思いを語り合つて、差別解消に向かつて生きていくみんなのエネルギーをより大きなものにしていきたいし、より確かなものにしていきたいと思います。それでは1年A組の授業を受けとめて、「ふるさと」の詩に寄せて思うことを語ってもらいたいと思います。

NO(女)私は今日、お母さんが参観に来てくれるかどうかわからなかったから、発表するのをどうしようかと迷っていました。それはお母さんが来ているときに発言するとお母さんに「それは誤解じゃ」と言われて怒られそうだったから、発表するのをやめようと思ったけど、来るかどうか分からなかったから、ちょっと言うのをやめようと思っていたんだけど、お母さんが来ないから言います。私は、このまえ今日の全体学習の参観授業の案内をもらった時、お母さんに「お母さん、水曜日、都合いたら全体学習、見に来て……」って言ったんです。そうしたら「その日、仕事が入っているから」って言われたので、お父さんにもそのことを言ってみただけど、お父さんは「その日、重要な会議がある」って言ったんです。そうしたら昨日お母さんが、ご飯を食べている時に「明日の授業、何時から？」って聞いてくれたんです。すごい嬉しくて、そんで「1時半から」って言ったら、お母さんが「お父さん明日、会社休みかもしれないから、休みだったら行くけん」って言うてくれてすごい嬉しかったんです。私は「それなら、お父さんも休みだったら、お父さんも来てほしい」って言ったら、お母さんが「お父さんはそんなん行けへんわよ。そんなしんだいもの……」って言ったんです。それで私が「なんで、そんな『しんだい』って言い方するの」ってすごい怒ったんです。そうしたら「だってお父さんはいつも『女の人ばかりしか行かん』とか言うて行かんだらう。」とか言ったので、私は「なんで『しんだい』って言うの。みんな一生懸命話し合いしよるのに、みんなが一生懸命、部落差別なくすために話し合いしよるのに、どうしてそんなこと言うん」と言ったんですけど、お母さんは全然聞いてくれなかったんです。それで、それから私は何も言えないようになって、なんかすごい悔しかったんです。それで私は「お母さんがそんな気持ちなんだったら、来なくてもいいから」と言ってしまったけど、さっきの授業（公開授業）で発言してくれたKさんみたいに、私もお母さんを尊敬しているしお母さんが大好きです。だからこそ、この気持ちをわかってほしいと思っています。

T 2: 今、話してくれたように、今日の全体学習を参観授業として、みんなのお父さんやお母さんにこの全体学習を見に来てくださいという通知を出したんです。それはみんなの家族の人を交えて、一緒にこの部落差別をなくしていこうとする熱い思いを共有し合いたい。共に本当に差別をなくしていく取り組みにしていきたい。そういう願いを込めて、みんなに通知を持って帰ってもらったんです。でも、みんなにとって熱いものがお父さんやお母さんにとっては、しんだいものでしかない。そういうふうにしかなんて写っていかん現実があるわけです。そういう現実をみんなですべて乗り越えていくか。今、Oさんが話してくれたお母さんのこと、「私は家でこ

うだった。私、こんな思いを持っている。こんなこと感じている」っていうこと、みんなの思いをつなげてください。

TK(男)僕の親の話になるんやけど、僕のお父さんは板野町出身で、お母さんは阿南市出身で、お母さんはそんな部落の話は、あんまり聞いたことないからよくわからないって言うけど、こんな全体学習の後やクラスでの部落問題学習をやった後に、お母さんによくこの話をします。母さんはこの話を真面目に聞いてくれるので、僕がもっとお母さんにいろんな話ができるようになって、もっとお母さんが真剣に考えていくことができるようにしたいと思います。

TK(男)僕は学習会に参加していて、その学習会で自分が部落の出身であるっていうことを知ったんだけど、やっぱり初めはみんなとは違う存在というように感じる事があって、すごく苦しいときもあったんです。僕の家はお父さんが部落の出身で、僕はそのことがすごく嫌だったんです。だけどお父さんは僕のために会社で一生懸命働いたり、いろいろ頑張っています。そんなお父さんの姿を見てきて、部落ということで差別することは絶対おかしいって思うようになったんです。これは一生懸命生きているお父さん見て、人間は部落とかそういうのは全然関係ないと思うようになってきました。人間はやっぱり一人一人の心とか生き方とか、そういうものがすごく大切だと思うんです。絶対人間の価値というのはみんな同じと思うし、やっぱり考えというのは変われると思うんです。今日僕のお母さんは来てくれています。お母さんは必死に頑張っているけど、僕のおばあちゃんは同和教育に対してあまり関心とかはないので、僕はあきらめないでいろいろ話をしていきたいと思うんです。お母さんとお父さんがこの頃、この話ができるようになってきたように、人間は変わっていけると思います。それに絶対部落に対する差別というのはおかしいと思います。

T 3:最初はやっぱり部落っていうのは重かった。部落というのはつらかった。でも、この学習を積み上げていく中で、そういう自分が段々変わっていくし変わってきた。そして、前だったら絶対こんなこと家の中で話ができなかったのに、この話が段々とできていくようになる。人間は変われるって思うんです。そのためにこの授業をしているんだと思う。今のK君の思いを受けて、みんなの思いつなげてください。

NN(女)「ふるさと」の詩に寄せて思うことを言います。第2連のところで「ふるさとをあばかれて縊死した人や許婚者(いいなずけ)に去られた人がいた」とあるけど、私はそこまで差別がひどいものとは全然知りませんでした。それで、知らなかったからいいとかそういうのでなくて、知らなかったからこれからこの問題を一生懸命勉強して、差別の本質を理解して、自分が本当に好きになれるように頑張っていきたいと思います。それから、第3連のところで「胸張ってふるさとを名のらせたい」というところがあるけど、私はもしかしたら誰かに住所を聞かれたら、「私は板野町でも部落ではない」という気持ちで住所を言うかもしれませぬ。私の意識の中には、まだ部落って嫌という感じが残っています。部落でなくてよかったという差別意識をなくして、堂々とふるさとを語り「部落のどこが悪いんだ」って言える人間になっていきたいです。

T 4:自分の差別意識に気づき、その意識を越えて「部落がどうした」って言える私たちでありたいと思う。今、2連の話をしてくれたけど、この痛みっていうのは「その立場にならなければ分らない」って思った時期があったんです。いや今もあります。でも、そのことをわかろうとする努力はできます。その努力の中でお互いの痛みが分かり合えるのが人間だと思う。そして本当にみんなが差別解消に向けて自分のこととして歩いていける関係になっていく、そ

のためにこの学習を積み上げていると思います。みんなの思いをつなげてください。

ST(男)昨日学習会でも発言したことなんだけど、僕のお父さんとお母さんにこの「ふるさと」の詩を見せたんです。この「ふるさと」の資料っていうのはすぐ読めるのに、お父さんとお母さんは黙ってこの詩を見つめていました。10分くらい黙って見ていました。10分くらい経って、僕に話しかけてきました。そのとき僕に言ってくれた言葉が「ふるさとを隠さんと堂々と語っていけよ」という言葉でした。僕はお父さんやお母さんが言ってくれるように、ふるさとを隠さずに堂々と生きていきたいです。

TM(男)ときどきお父さんは部落のことを話してくれるんだけど、その時はあまり話が弾まないんです。今お父さんが遠くの街に出張みたいななんに行ってるから、お母さんと2人でときどき話をしようと思う時はあるんだけど、いつもお母さんに違う話にすり替えられて、話は途切れてしまうんです。もうちょっとしたらお父さんが帰ってくるので、帰ってきた時は今までより詳しく話してみたいと思います。

TM(男)意見というよりみんなに訴えたいことがあります。夏休みに県奨(徳島県高等学校解放奨学生集会)に行ったとき、その集会に参加していた高校生の人たちが発表したら参加者全体で拍手していたんです。なんで拍手するんだろうと思っていたんだけど、その集会で中学生の僕も発表したんだけど、そのときみんなが拍手をしてくれて、その拍手の意味が分かったんです。それは一人一人が苦しいことやつらいこと、重いものを乗り越えて発表する姿に対する励ましの気持ちや、一緒に頑張っていくぞという思いが込められているんだと思ったんです。C組のT君に「拍手しよう」って言ったら、拍手してくれるって言ってくれたし、Y先生にそのことを言ったら「自分がいいと思うんだったらやったらいい」って言ってくれたけど、二人だったら恥ずかしいから、今言ったようにみんなでみんなの発言に拍手していきましょう。

T 5: この前C組の全体学習の時にも県奨の話が出たけど、だれか県奨について説明してくれる。

TK(男)高校生が部落問題について考えるというか、部落出身の高校生の仲間が集まって、部落差別解消に向けて話し合いをする集会です。それで僕も高校生になったら、部落差別をなくしていくための奨学金をもらって頑張っていこうという気持ちで夏休みにM君たちと参加したんです。

T 6: いわゆる解放奨学金という部落解放運動が運動によって勝ち取った奨学金を受けている部落出身の高校生が、夏休みの第1日目に開いた集会が県奨というんです。その集会は、奨学金を受けている高校生が、部落差別をなくしていく主体となっていくためにどう部落問題とかかわっていくかを語り合う学習の場なんです。今年は徳島市の郷土文化会館で高校の同和教育について、また高校生である自分に何ができるかということで話し合ったんです。その話し合いの中で部落出身の高校生がどんどん思いを語っていった。その思いにみんなが拍手で応えて連帯していく場面があったんです。その雰囲気は、まさに高校生がつくっていった全体学習だということをおの場にM君たちは思ったと思う。参加した人たちは思ったと思う。その中で本当に熱い思いを語ったみんなの仲間もいるんです。みんなの前でしかも大勢の前で自分の思いを語っていくということは、やっぱり苦しいものがあります。己をさらけ出していくということは苦しい部分があります。その苦しいものをみんなで担いで行く、みんなで見ないでいくということがすごく大切だと思います。絶対に傍観者がいない、みんなが熱くなっていく、みんながつながっていく、そんな時間にしていきたい。そんな関係にしていきたい。M君の言ってくれた拍手の意味はそこにあると思います。みんなの熱い思い、つなげてください。

《それ以後の発言には学年全体から拍手が起こっていく》

HM(女)「ふるさと」の詩の方に戻るんだけど、A組の公開授業で何人かの人が、丸岡さんの強さみたいなものを自分が持ちたいって言っていたけど、丸岡さんはもともと強かったのではなくて、丸岡さんも私たちが全体学習で発言するたびに強くなっていくように、仲間と部落問題の学習を積み上げたり、その思いを詩に著すことによって強くなってきたんだと思います。それともう一つ思うことだけど、私たちがこの学習で力をつけているように、毎日の生活の中で悪い心も同じぐらいのスピードで入ってきていると思うんです。人間というのは、心のすべてが強さで覆われているのではなく、強い自分になっていくことを目指して、努力していくことが大切だと思います。自分の中にはいつも差別意識がわき起こってくることを理解して、その差別意識と闘っていくことが必要だと思います。私の発言、間違っていると思ったら発表してください。

T 7: 知らず知らずのうちに板野町が差別されていることを知っていくし、なんか違うという意識を持っていく。「けもののような鋭さで覚えた」とある。板野町であることを恥ずかしいと思う。板野町は違うということ意識する。A組の公開授業の中の発言に、「板野中学校、〇〇さん」と陸上競技大会で言われたら、なんか自分の変な目で見られとるような意識が自分の中にできてしまっていたという発言がありました。みんなが小学校の低学年の時には、そういう意識はなかったと思う。でも、そういう意識がみんなの中にできてきた。そういう意識をみんなは空気吸うように自分の中に入ってきた。そういう自分の中にある差別意識と向き合い闘っていくことが問われていると思う。今、Mさんが言ってくれたこと、みんなはどうとらえましたか。

NO(女)私はMさんと同じような意見なんだけど、今Mさんが言ってくれたことで気づいたんだけど、みんなは「丸岡さんみたいに強くなりたい」って言っていたけど、私たちが弱いように、きっと丸岡さんも弱いと思うんです。その厳しい中で、自分を強くしていくために詩に書いて一生懸命人間として誇れる生き方をつかもうとしているんだと思うんです。だから、決して丸岡さんが強いのではなくて、丸岡さんも絶対弱い部分があると思うんです。私たちも強いところがあるし、弱いところもあるでしょう。私は丸岡さんもそういう自分を見つめていく中で、こんなすごい詩が書けるようになって、自分を強くしていく生き方を続けてきたんだと思うんです。

T 8: 強くないから強くなるためにこんな詩を著しながら訴えている、差別と闘っているという意見、みんなはどう思いますか。

MK(女)私も〇さんやMさんみたいな意見で、丸岡さんは強いというけど、私も〇さんと同じ意見で丸岡さんはもともと強いのではなくて、本当は弱い面がいっぱいあって、そういう弱い面を克服するためにこういう詩を書いているんだと思います。みんなは「丸岡さんみたいに強くなりたい」と言うけど、私は丸岡さんよりも強くなりたいと思います。それは今まで丸岡さん一人だけが強かったわけではないけど、丸岡さんを目指すというだけでは、まだ差別には勝てないと思うから、私はいつか丸岡さんよりも強い力を持ちたいと思います。それと、これは私の家族の話ですが、全体学習の通知をもらったとき、「全体学習があるから見に来てよ。」と言ったら、「仕事があるから来れん。」と言われて、それで今日は来てないけど、本当のことをいうと、私は部落問題学習の話をお母さんとしたことがないんです。どうしてしないのかというと、みんなが言うように私もお父さんやお母さんが大好きなので、お父さんやお母さんが差

別していると知ることが怖いんです。そんな気持ちが私の心の底にあって、部落問題学習の話をしていないんです。ときどきお母さんとおばあちゃんが話をしている話の中に、お母さんの仕事場の同和地区の人の話が出てきます。「〇〇さんはすぐに怒るとか。〇〇さんは、同和地区の人やなあ」とよく言うんです。また「あの辺りが同和地区やなあ」とか言うんです。それで「そこは通らんようにしよう」とか「その人は何とか……」とよく言うから、私も腹立って「なんでそんなこと言うの」と言ったら、必ずと言っていいほど「昔からそうなんでよ。」と言うんです。それでこの前に話した時に「部落問題のことどう思う」と聞いたら、「友達になるんはいいんでよ」と言うけど、「結婚するんだったら、そういう子とは絶対したらいかん」と言うんです。「私がもし、そういう人と結婚すると言ったらどうする」と言ったら、軽蔑するみたいな言い方をするんです。だから、そういう家族を変えていけるようにことに、丸岡さんよりも強い力を持ちたいです。

T 9: 丸岡さんもかつて部落に生まれたことを本当に恥ずかしかったことがあった。隠していたときもあったんです。でもこういう詩を書いたり、多くの仲間とみんなが全体学習しているように、本当の思いを腹の底にあることをぶつけ合いながら頑張っていく中で変わっていったんです。亡くなられてもう10年ぐらい経つんですけど、私は教員になった2年目に、偶然京都で会ったんです。そのとき徳島の佐藤文彦先生が紹介してくれたんです。そのとき、丸岡さんは私になんと言ったと思う。(少し間をおいて)「先生、同和教育一緒に頑張りましょう」と言われたんです。私は初めてあったのに、そのときこの人は共に部落差別をなくしていく仲間なんだと思ったんです。それは丸岡さんの言葉から実感したことです。私はそのとき、丸岡さんを支えてきたのは、共に部落差別をなくすために歩いている多くの仲間なんだと思ったんです。人間は仲間によって強くなると思います。多くの仲間と本心を語り合っていく中で変わっていけるんです。丸岡さんが変わったように、Kさんのお父さんやお母さんも変わっていきたくらうし、丸岡さんがかつて部落におびえたように、差別意識を植え付けられていたように、みんなも、みんなのお父さんやお母さんも、そういう差別意識にくっと押し込められていて、差別する意識を持たされてきたんです。でも、人間は変わるんです。いろんな人と腹の底にあるものを見つめ合いながら、自分というものを語り合いながら、誰か(仲間)を信じることができたら、誰か(仲間)とつながることができたら、そういう仲間が増えていくことによって、人間は変わるんです。そんな学習をみんなと積み上げていく。そんな学習を広げていこうと今しているんです。小学校でもやるし、中学校でもやるし、高校でもやるし、社会においてもそうです。そういうものを今積み上げているんです。今、何人かの仲間がお父ちゃんやお母ちゃんのこと語ってくれた。その思いに重ねて、みんなの思いつなげていこう。

EN(女)私は中学校に入学した頃は、すごくこの学習するん嫌だったんです。でも、4月にY先生が涙を流しながら自分のことを語ってくれたとき、私はお父さんにそのことや自分の気持ちを話したことがあったんです。そのときお父さんは「お前どう思うとんな」と言いました。私はそのときのお父さんの態度が嫌になって、その時からずっとお父さんに自分の気持ちは言わなかったんです。それ以来、全然この話はしていないんです。それでこの前の全体学習の通知をもらった時も、先生が「家の人に話をして」と言ってくれても、親には見せないで、全然この話もしなかったんです。やっぱりこの話をしたら嫌な気持ちになりそうに思う自分があって、自分の方からこの話は避けているといいます。

NM(女)私は全体学習の通知がもらったとき、お母さんにその通知を見せたんです。そのとき、私

から「この日仕事休み」と聞いたんです。そうしたら、お母さんが「休みやけん、見に行っておあげるわ」と言ってくれたんです。そのとき私はすごく嬉しかったんですけど、今朝「来てくれる」と言いそびれてしまってまだ来てないんです。だから、また今度こういう機会があったら絶対誘いたいと思います。

NM(女)今話すことはD組の教室でも話したし、昨日学習会に行っても話したことなんだけど、D組のある私の親友のお母さんの話になるんだけど、その子のお母さんの知り合いが、交通事故を起こして、その交通事故の相手がたまたま部落の人であって、そのときにその知り合いの人はとても困ったという話を聞いて、その子のお母さんが「部落の人は悪い人だよ」と自分が経験したことでもないのに噂で、勝手に決めつけていたことをその子が、泣きながら言ってくれたんです。その子はお母さんに差別していることの間違いをしっかりと行っていきたくて言っていたから、その子は差別に負けてないと思います。今ここにみんなも多分「差別に絶対負けたくない」と思っていると思うんです。「勝ちたい」という気持ちより、「負けたくない」という気持ちの方が強いと思うんです。同じことかもしれないけど、考えてみたら全然意味が違います。部落の子は差別されるというのはおかしいでしょう。みんな同じ人間だし、差別する方は自分より下を求める心があるから差別しよるわけでしょう。私だって差別意識があるし、自分で強いとも思っていないし、だから「負けたくない」という気持ちは自分自身あるんです。前までは発表しなくて、「こんな授業つまらん」と思っていた自分が今一番嫌いなんです。だから、みんなも自分自身に負けなくなかったら、人に聞いてもらうということより、自分自身で自分を育てていかなかったら、強くなっていかないし「負けたくない」という気持ちがあるんだったら、この場で発表して自分で自分を育てていかなかったら差別には勝てないと思うんです。差別というのは悪いとみんな分かっているんだから、そのことについてもっと話していこう。

TT(男)僕はお母さんに1回結婚の話をした時があって、多分お母さんとお父さんは「自分がいいと思った人と一緒になりなさい」と言ったと思うんです。その時、結婚差別とかは知らなかったんです。お父さんとかお母さんは自分が好きな人と結婚したから、僕にもそうなってほしいと思っています。

KT(女)B組で部落問題の学習をしたとき、私は生活ノートに「今、私に足りないのは勇気だ」と書いたことがあります。まだ私もお母さんやお父さんと部落差別のことについて話したこともないから、これからは自分に勇気をつけながらお母さんやお父さんに部落差別のことをいろいろ話していきたいと思います。

MT(女)夏休み中にあったことなんだけど、1回徳島大学病院に血液検査をしに行きました。そのときその病院には、障害を持っている人がたくさんいました。障害の重い人とか、人の手を借りないと歩けない人とかがいたんですけど、その中で私の正面の椅子に座っていた人は車椅子に乗っていて脚が作りものみたいでした。それを見て隣にいた妹が「あの何しよん」と私に聞いてきました。そのとき私は「あんまり見られん」としか言えませんでした。なんかすごく恥ずかしかったです。折角こうやって差別問題について学習しているのに、こんなことしか言えないなんて自分が自分でないみたいで、今度もしそんなことがあったら、妹であっても小さい子であってもしっかりと話ができるようになりたいです。

T10：今、話してくれたように、この学習を積み上げていく中で、自分の差別意識に気づいていくんです。部落差別する自分、「部落でなくてよかった」とどっかで思っている自分、「あの

子よりましだ」と思っている自分、そういう自分の差別意識に気づいていくんです。そして、そんな弱い自分と、その自分の差別意識と向き合っ、それと闘っていける、そういう弱い自分に打ち勝っていける自分になっていくんです。おかしいことがおかしいと言える。差別というのは、する者もされる者もその両方が、人間的でなくなっていくんです。人間というものは本当に誇らしいものです。部落に生まれた部落に生まれなかった、その立場は違っても、人間はいろんな状況の中で必死に生きてきた、みんなを育ててきたお父さんやお母さんやおじいさんやおばあさんというのは、本当に誇りうるもんなんです。人間の本質はそういうもんなんです。この前の学習会でもいろんな話が出たんだけど、ほんとおかしいことはいっぱいあるんです。そういう差別を一つ一つなくしていける一人一人になりたいと思う。この学習の中でいろんなことが見えてきた。今までそんなに考えたことなかったけど、ほんとに自分のこととして考えることができるようになった。この「ふるさと」の学習の中で自分という人間が好きになっていく。今まで見えなんだことが見えてくる。そんな思いを出し合いたいと思います。

YM(男)僕のお父さんはS地区生まれで、確かにうるさいところもあるんだけど、お父さんは負けず嫌いで、部落外の人からなんか言われてもすぐにカッときて、乱暴な言い方で言い返してしまう。でもその内面にとっても優しいものを持っているお父さんが本当は好きです。僕のふるさとは三つあって、一つ目は小さい頃に生活していたところがあるのと、二つ目は徳島市のN地区というところで田んぼとかが多くて田舎だったんやけど、そこで暮らしたときことを僕がよく覚えているのは、僕たち家族がどっかへ行って帰ってきたりしたとき、近所のおばさんたちが集まってヒソヒソと話をし、とても冷たい目で僕たちの方を見ていたことを覚えています。その頃、僕に友達がいたんですけど、その友達の家遊びに行った時、その子のおばさんがその子がいるのに「いない」と言って追い返されたことがあって、そのときは何にも言えないでくやしい気持ちになって、家へ帰って毛布の中で隠れて泣いたこともありました。そんな状態の中で、お父さんはやっぱりその人たちにうるさく怒鳴りつけたりするとがありました。三つ目は板野町だけど、板野町に来てから僕は勉強もするようになって、僕らは一生懸命生きているのに、その雰囲気や壊されるようなことをされたことがありました。僕らの家族の中でやっぱりお父さんも体が悪いし、おじいちゃんも入院してるし、お母さんも仕事の関係で、お酒を飲んで体が悪いんです。そんな厳しい中で、家族から僕と妹は期待されているし、これからも頑張っ、ほんまに世の中に通用するような心を持って一生懸命に仲間と共に生きていきたいです。

T11：この学習をみんなとすることが私の大きな喜びであり、自分がどう生きていくかというものをつかんでいくことにつながっていると思うんです。今M君が最初にお父さんはうるさいと言ったけど、部落の人がガツと大きい声で怒ったら「ああやっぱり部落」と思う。みんなの中に部落に対する差別意識が入っている。A組の公開授業で豊田先生が中学2年の時に部落問題の学習をしたら、部落の人と会ったこともないのに「部落の人はものすごい怖い」というイメージがだけが残っていた。そういう差別意識だけが入ってくる。そんな差別意識を持っているから、目の前に何か現象をとらえて、「ああやっぱり部落。部落の人は怖い。部落の人はめんどい」という気持ちがみんなを支配していく。みんなの中にある差別意識が、部落に対する部落の人に対する差別となって出てくる。その差別意識に気づき、その差別意識を洗っていく。M君がこの前の学習会でもそのことを語ってくれたんだけど、みんなは本心を語ることによって、強くなっていくんです。しんどいことがしんどいと言える関係、苦しいことが苦しいと言える関係、本心を語ろうとしたら、まだやっぱり涙が出てくるかも分からない。でも、そのこ

とを語ってくれる仲間がいるということ、その思いを必死に聞いてくれる、そしてそのことに必死に思いを重ねてくれる仲間がいるということ、その仲間になんかつながっていきける、みんなは一人一人であってほしいと思います。みんなの思い返していきましょう。

TK(女)私はお母さんやお父さんと差別の話とかはしたことはないです。この話をしようと思っても「ちょっとお母さん」と言ったぐらいで、「やっぱりいいわ」という感じになってしまいます。それでもし自分が言ったら「また今度な」とか、そんなこと「なに言よん」とか言われるのが嫌だし、言って反発されて自分がそのことに「答えられなかったら」という気持ちに負けて、何も言えない状態なんです。今までしてきたことが何なんだろうと思ってしまうんだけど、やっぱり親にも知ってもらわないと今までしてきた学習が無駄になると思うので、親に今までしてきたことを言ってから理解してもらえようようにしたいと思います。

MO(男)泣いてまで頑張ってくれている人がいるのに、黙っていたらあかんと思ったので発表します。僕はまだお母さんとかお父さんとかと話ができません。それはただ、お母さんやお父さんに話しかけていけないだけです。そのことがすごく恥ずかしい。それは自分がまだ弱いからだと思う。だから、これからもっと発表していってお父さんやお母さんに話せるように頑張りたいです。

T12: みんな、本当に強くなっていると思う。最初に県奨の話が出てみんなから拍手が起こりだしたけど、その県奨でO君が発表したんです。O君は高校で頑張っている兄ちゃんの思いを語ったんです。「さっき兄ちゃんが発表しました。兄ちゃんは強いです。僕も強くなりたいです。兄ちゃんは頑張っています。僕も頑張っていきたい。」そんな思いをO君が発表したんです。そのときも涙がいっぱい出て何度もつままったけど、600人余りいた高校生から「頑張れ」「頑張れよ」といっぱい声かけられたんです。部落はやっぱり重い。やっぱり部落を差別してしまう意識がある。部落を恥ずかしがっている意識がある。「部落の人はやっぱり違うんや」という意識がある。そういう自分のドロドロしたものを洗っていく。自分自身との闘いなんです。人のことはいくらでも言えるんです。自分との闘いなんです。自分が何をしようか、自分が何を訴えようか、自分が何をできるかということなんです。腹の底にあるものをつなげてください。

KY(男)僕も学校とかで話し合っている部落差別の問題を親に話したくても話せません。それは親ともほとんど話が合わないし、もう祖父とか祖母もそういう話を聴いてくれないから、こういう話はほとんど学校でしか出来ないけど、祖母に僕がこの話をしたとき、「勉強せえ」と言って聞いてくれなかったことがあったから、それから全体学習の案内をもらっても、ほとんど渡さなくて、今日こんなことがあることももちろん知りません。M君とかが自分の親を誇りに思っているのをみたら、何か凄く温かさを感じたりすることもあるけれど、自分だけで何かうじうじしているのが、最近つらく感じるようになってきました。

YO(男)僕はこの前、B組で話し合ったことを言います。僕はB組で話し合っているときに先生が、自分の思っていることを話してくれたので、僕は「すごいなあ」って発表したんです。そうしたら、それを言った後すぐK君が「自分に自信とかあったら誰でも言えるんちがうん」って言ってくれたんです。そのとき僕は「そうやなあ」と思いました。僕は僕自身を強くしていくために、大勢の中でも発表していきたいし「悪いことは悪い」と言える人間になっていきたいです。

T13: 自分に対する誇り、板野町に対する誇り、板野中学に対する誇り、自分のお父さんやお母

さんの思い、その生きざまにそのすばらしさに気づいていく、目覚めていく。それがみんながみんなの人生を生き抜く自信になっていく。人は変わるんです。キラキラ輝く生き方ができるんです。そういう自分にしていくために今、闘っているんだと思う。自分との闘いだ。語っていこう。

NM(女)私は、入学してすぐぐらいの時、部落、部落差別に対する怒りはあんまりなくて、「部落差別はいかんなあ」というくらいだったけど、今は部落差別に対してすごく腹が立ちます。差別を受ける理由なんてどこにもない人が差別されて苦しむなんて絶対許せないし、自分が好きな人と結婚するのも反対される。結婚して幸せになることも出来ないなら、絶対に部落から逃げようと思うかも知れません。でも、部落から逃げて自分は差別を受けなくても、心の中に部落という重いものが残って、ずっと生きていく中で部落差別が自分を苦しめていくと思います。自分自身のことを隠して逃げていくばかりでは、部落差別はなくならないと思います。私はうまく発表できないけど、私の言った一言一言が自分に負けなための発表だし、部落差別をなくす第一歩になっていくと信じているから、どんなことでも発表していきたいです。

T14: 差別意識がみんなのお父ちゃんやお母ちゃんや親戚の人や周りの人についていて、その中でやっぱり部落は重い。逃げられるなら逃げたい。隠し通せるなら隠し通したい。そんな気持ちになることもある。さっきA組の公開授業でA君がお母ちゃんは部落やけど、お父ちゃんは部落でない。お父ちゃんの籍に入ったからもう逃げられる、もう関係ないと思いたいと話してくれた。それでは、元の戸籍の中に『部落』と書いてあるのか。そんなこと何も書いてない。でも200年も300年もの昔につくられたもの、制度としてはなくなっているものを引きずって、「まだ、私やより気の毒な人がいる」という中で、差別する私たちが存在している。そういう意識が私たちの中にある。それは絶対におかしいことなんだ。そして、その証拠はどう示せるのだろうか。でもそれをいまだにこだわって差別する人がいる。そういう人たちにつぶされていく生き方を絶対にしたくない。みんなのおじいさんやおばあさんは、お父ちゃんやお母ちゃんは、絶対あってはならないその差別の中で苦しみながらも必死に生きてきたんだ。みんなを育ててきたんだ。そのおじいちゃんやおばあちゃんや、父ちゃんや母ちゃんを絶対に差別するような人間には絶対になんてほしくない。差別は絶対になくせるんだ。部落差別というこんな愚かなものは絶対になくせるんだ。今、Mさんが語ってくれた。4月のMさんだったら、今のようないい思いを持つなんていうことは夢にも思わなかつただろう。Mさん。後ろ見てみい、S先生の顔くしゃくしゃや。分かるか。やっぱりな先生にとっても部落差別は重い。みんなが自分の中にある差別意識、自分の家族の中にある意識、そのことを語り合いながら、話し合いながら変わっていける。人間を差別することは、自分の魂を傷つけていくことや。そういうものがみんな自身の中でしっかりと分かっている。この学習を通してみんな本当に強くなれる。そして、みんなの大切なお父さんやお母さんがほんまに好きになれる。まだ、部落にこだわるとお父ちゃんやお母ちゃんをみんなは絶対に解放できる。変えていくことができる。みんなにはそういう力がある。そういう仲間がみんなにはいる。今、本当に自分のすべてをぶつけてくれる仲間につなげて、「これ、私のほんまの思い」って「僕のほんまの思いなんだ」ってそのことをみんなに語ってもらって、今日の4回目の全体学習を終わりたいと思います。

KT(男)僕は前に親と部落差別のことを話し合いました。そのときに出てきた話だけど、僕は板野西小学校出身で、西小学校には部落はないということであんまり真剣にこの勉強をすることがなかったと思うんです。だから僕はもっともこの勉強を頑張っていけないとみんなのよう



ました。それはしょうがないと思ったんだけど、私はまだ親に部落差別のこととか全体学習のことは、一言も言ったことがなくて、みんなの話を聞いていると、親に話したり親から聞かれて言い返したりいろんなことをしているから、私もこれからは話していきたいなあと思いました。

T16：今日の授業もそうだし、今までやってきた全体学習も文章にしていきます。この授業に寄せる思いを家の人と語ってほしいと思っています。みんなにはすごい力があるんだから自信を持って話していこう。

HM(女)ー昨日の道徳の時間に「相手の目も見ずに本音が言えるのか」と言われて、あんまり人目を合わせるの得意でないし、でもやっぱり部落差別と闘っていくのだから、やっぱり逃げてばかりいないで、やっぱり人の目を見て発表していきたいです。クラスではあんまり発表できてないけど、でもなぜか全体学習で発表できるというのは自分でも不思議です。やっぱりクラスでも全体学習でも発表していくうちに自分が一步步進んでいくのだから、もっと前を向いて自分に自信と誇りを持った生き方をしていきたいと思います。

T17：みんな本当に強くなっている。胸はって頑張っていこう。

YE(女)小学校の6年くらいから部落差別のこと学習してきたけど、それまで部落のことについてひどいことを言われてきたんです。6年の時に部落問題について学習したとき、自分が部落の人間であることをみんなに言ったんです。そのときすごい心に重いものがきたんです。その重いものがあるというのは、自分が自分を差別している部分があるから、そんな気持ちになっていくんだと思います。この勉強をしていく中でそのことに気づいてきたけど、何か自分にすごく腹が立ってきてくやしかったです。でも今こうやって発表していく中で自分が強くなっているし、自分が好きになっているから、これからも自分の本当の気持ちをみんなに語りながら、心の中のドロドロしたものを吐き出していきたいと思います。

T18：今、言ってくれた中で「自分が自分を差別している」という言葉があったけど、そのことをみんなでしっかりと考えたい。差別をなくすということは自分自身の差別意識をなくしていくことにつながっていくと思う。そのことにかかわって語ってほしい。

YM(男)僕の父さんはK株式会社という会社の勤めています。そこは、自動車の部品のベアリングとかを作る会社で、父さんは油がいっぱいのところベアリングを作っています。だから父さんはいつも会社から帰ってくると油の臭いにおいがします。この前、徳島市内に母さんと行くとき、父さんの会社の前を通りました。その油の臭いにおいがしたんです。そのとき、母さんは「臭いなあ」とか言わなくて、僕に「これ、父さんのにおいやな」って言うてくれて、「父さんも今頃ここで頑張っているんだろうなあ」って言ったんです。その時すごく母さんが輝いて見えて、母さんがすごく好きになったんです。僕はそんな母さんを誇りに思うし、僕も差別意識がなくなったら母さんのように輝けると思うんです。

T19：人間というのは、その本質において絶対輝く存在だと思うんです。でも、私たちの中に差別意識があって「あの人よりましや。あそこよりましや」という意識に押さえ付けられて、自分というものが大切にできないし、誇りにできない弱さをさらけ出してしまふ。そういう弱い自分との闘いの中で、それを乗り越えたとき、本当にキラキラしたものを出していくのが人間だと思うんです。差別をなくしていくということは、私たちの生命を輝かせていき、私自身が好きになっていくことだと思う。お父さん、お母さんを好きになっていくことだと思う。大好きなお父さんお母さんにしていくためにみんなの本当の思いを語ってほしいと思います。

HK(男)僕の母さんは、板野町のことを「こんなところに来るんでなかった」とか、「ここはこんなことがあるから……」と言います。僕は「板野町は悪くない」と思うけど、僕も苦い思い出があるから言えないところがあります。僕自身のそんな意識をなおして、自信を持ってお母さんの板野町のよさや差別をなくしていくことの大切さを言えるようになりたいと思います。

NO(女)私はEさんに言いたいことがあります。さっきEさんは「自分のこと言わないで、人のことばかり言う」と言っていたけど、私もそうなんです。今もそうです。そんな状態で苦しんでいるのはEさんだけとちがうから一緒に頑張ろう。それと、私はさっきから人のことばかり言っているから自分のことも言います。私は今も人のこと差別していると思います。例えば、誰かが言った意見に「あの子は、ああいうふうに思っているのか」とただ思うだけでなく、自分より下に思ってしまうんです。「あの子はまだあんな考え持つとんじゃ」というように思ってしまうんです。そんな自分がすっごい嫌になります。今、全体学習しているのに、一生懸命部落問題のことについていっぱい発表して話し合っているのに、どうして私は自分が上だと思って、差別してしまうのだらうと思うと、すごく自分が恥ずかしいんです。一生懸命に頑張っていて、1年生が終わるまでには、絶対そんな意識を自分の中からなくしたいです。

ST(男)僕は「ふるさと」の詩の中にある「ふるさとをあばかれ縊死した友がいた」というところと「ふるさとを告白し許婚者に去られた友がいた」というところですごく腹が立ったんだけど、その怒りと同時に不安もあります。僕は実際、部落の人間だから、僕も将来自分の住所を知られて自殺しないかとか、許婚者にふるさとを告白したことで、振られたりしないだろうとかすごく不安があります。だけど、そんな差別する人に負けたくないし、それに「それがどうした」と言えるような人間になりたいから、この学習を頑張っています。将来だれかに住所を聞かれても、「僕は板野町〇〇から来ました」とはっきり言えるような強い人間になりたいです。

KB(女)みんながよく「差別は悪い」と言うけど、みんなはその意味が分かっているんだろうかと思うんです。みんなはいろいろ意見に流されてわかったような気持ちになっているけど、もっともっと考えることが必要だと思います。前の全体学習でも言ったことだけど、差別について、そのしくみや本質をもっともっと考えることが必要だと思います。本当はわかっていないのに全体の雰囲気ですら思っているだけの部分もあると思います。

T20：今のBさんの発言についてももっともっと考えたいと思います。みんなの中にどう響いたでしょうか。

T(KM)「全体学習では、部落問題学習を一生懸命しよるけれども、それがみんなの生活の中に生かされているのか」ということをBさんは訴えているように思います。例えばさっきMさんから障害者の差別や男女差別について意見が出てきたけど、それらの差別と部落問題学習をどれだけつなげて考えているのかなというようなことと僕は受けとったんです。世の中いっぱい差別があるのに、どうして部落問題学習を選んでいるのか。部落問題学習をしている中から、そこからいろんなところへ広げて考えていかないかと思うんです。E組は板野養護学校と交流学習をしています。今日生活ノートにこんなこと書いてあったんです。E組は交流学習をしていて、交流学習を授業を飛ばしてするんです。そうしたら、「E組はいいなあ。交流学習をしよったら授業が飛ぶけん楽でええな」というようなことを言われて、すごく腹が立ったという人がいるんです。それで「うちのクラスの中にも交流学習があるから、授業がとぶから楽でないかな」と思っている人もひよっとしたらいるかもわからないけど、そういう人がいたら「悲しいなあ」というようなことを生活ノートに書いていた人がいるんですけど、その部落問

題学習をいろんなところへ広げていくことが大切なんだと私は思いました。

T21：みんなで考えてみよう。どうですか。

KB(女)私は「部落差別が悪い」ということや「障害者の差別も悪い」ということは、絶対に悪いって分かってるんだけど、「部落差別が悪い」と思い切れないんじゃないかと、差別というものが悪い悪いというけど、どれだけその差別ということの意味がわかっているかをみんなで考えていきたいと思います。

T(MN)私はBさんの言っている意見が分かるような気がします。この資料なんかで、生命が奪われたとか亡くなったとか、また友達や許婚者に去られたとか、こういうような資料や障害者差別というようなものがあるということについては、皆さんはまだ腑に落ちないところがあると思うんです。Bさんにしても、皆さんにしても差別という言葉は分かっている。しかし、Bさんにしても、皆さんにしてもこの資料と重なるような差別の体験はしたことがない。体験をしていないのに多くの仲間が、差別は悪いということを書いてくれるけど「差別という言葉が悪いのか」「本当に悪いのはどこなのか」ということをもっと知りたいという気持ちと、みんなは差別についていろいろと発表するけど、本当にわかっているんだろうかという気持ちがBさんの心の中にあると思うんです。自分は体験していないことをみんなの発言を通して、単なる感情で受け取るのではなく、「本当に分かるとんだろうか」「どこがいかなのだろうか」「どうして差別がいかなのだろうか」ということについてみんながもっともっと突っ込んで学んでいくようになったら、この学習は本物になっていくと思います。自分たちはそんな部落差別を受けていないのに、ただ単に部落差別の現実を学習したり、いろんな人の話を聞いて、差別はいけないということを書き言葉にするだけは、この問題は解決しないんです。この学習の中でつかんだ気持ちを土台として、これから先、部落差別がどういう社会的な構造の中に生き続けてきたのか、いまだにあるのか、そんな差別のしくみや構造をみなさんがしっかりと学習してほしいと思うんです。単なる言葉だけの学習だったら、「差別というけど、どこが差別なのか。差別しとらんでないか。差別しなかったらええんでないか」という言葉で終わってしまうんです。言葉だけでは心まで変わらないんです。そこをやっばりお父さんからでも、お母さんからでも、きちっと話していける人間になって、部落差別をなくし、一切の差別をなくしていく皆さん方になってもらいたい。そのためにはこういう学習を重ねるたびに、差別についてただ差別があることだけを知るのでなくて、差別がどのような機能を果してきているのかということや、どうして生き続けているかということこれから学習してもらいたいと思います。

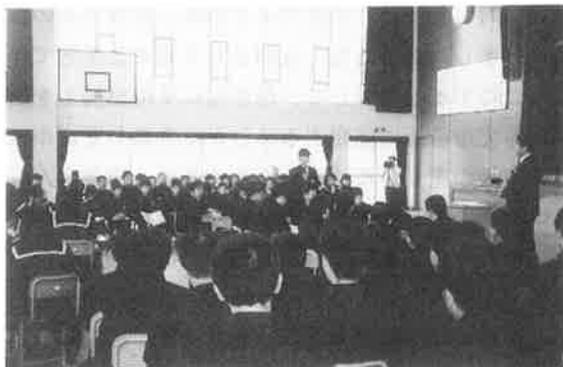
T22：みんなのお父さんやお母さんが差別をしようという発言があったけど、どうして差別をしようか、そういう意識がどのようにつくられてきたのか。差別するようにしくまれてきた差別の構造というものをしっかりとらえていきましょう。

NA(女)昨日の1年のお母さんから私のお母さんに「今日、全体学習に来てください」というような電話がありました。お母さんは仕事があつて来られなかったけど、お母さんは私に「仕事があつても多分行かなかつたなあ」と言ったんです。私は「どうして」と聞いたら、「全体学習に行ったら、何か言わなあかんから」と言って、お母さんは何か「そんなん、みんなの前でめつたなこと言えん」とか言ったので、「めつたなことってなに」と聞いたら、「部落とか、同和とか、そういうふうな言葉を言ったら、みんなに絶対なんか思われる」と言ったので、「私は何でそんなかなあ」と思ったんだけど、「大人の世界は、いろいろむずかしいことがあるんだな」と思いました。みんながここでいろいろ言ってくれたけど、お母さんにもそのこ

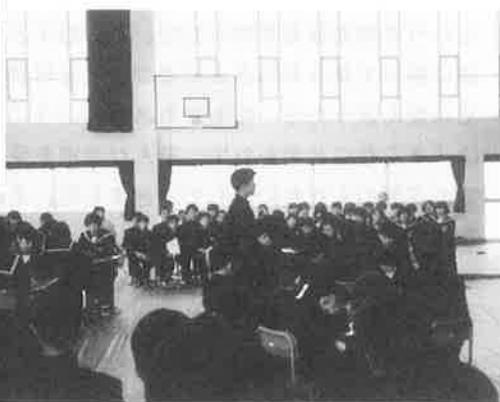
とをいろいろ言っておきたいと思います。今、私たちは学校に来ていて、全体学習っていうのを授業のような形でやってくれているから、私も部落差別があってはならないものと分かるし、差別絶対を許したらだめだと思ふし、今は発表できるけど大きくなって高校生になったり、大学生になったり、親になったり、おばあさんになったりしたら、多分私は言えないと思います。だから今のこの学習を頑張っておんどん自分の本心を言えるような心をつくっていきなさいです。MK(女)私は今まで先生が「今日は全員発言をめぐそう」と言ってくれなかつたら発表できなかつたけど、これからは自分の力で発表したいです。

T(MF)簡潔にまとめて言いますのでお願いします。全国青年集会という部落差別解消の集会があるんですけど、そのときにある同和地区のお母さんが、自分の息子の頑張りを見てきた中で、変わっていった自分の姿を報告してくれました。その報告について話をさせてもらいたいと思います。そのお母さんは、子どもが中学高校と解放子ども会や高校友の会とか、いろんな部落差別解消への取り組みに参加していることをずっと反対していました。子どもが頑張っている姿を見て、「そんな会に行ったら、同和地区というのがばれて、就職とかにも響いてくるのでは……」と思ってそんな取り組みをすることに反対したけど、それで子どもは「母ちゃんの言うことは間違っている。差別と闘っていくことをしなかつたら、人間として堂々と生きていけない」と思ってずっと高校友の会やそんな集会にずっと参加して、母さんにその気持ちを訴えていたんです。そして、その人は高校を卒業して市役所に就職することができました。市役所に就職して、1年くらい経ったある日にその直属の課長から「エツクのくせに、何言よんな」という差別発言を受けました。その息子さんは、そのことにものすごい怒りと腹立ちを感じて、家に帰ってからお母さんにそのことを相談したそうです。そのとき、お母さんは「黙つたり。そんなん言うたら、何もかもあかんようになる」と言ったそうです。けれども、その息子さんは「そんなこと言われて、そんな差別を受けたままで我慢できない」と言って、部落解放同盟の支部の人たちに話していきました。それから、差別をなくしていくための糾弾会という会を持つことになりました。そうして、その糾弾会の中で差別した側は「そんなんしとれへん。言うとなんしとれへん」と言い出し、聞いている証人が何人もおるにも関わらず、そういった形で反発してきました。そんな中でその息子さんは必死にその直属の上司である課長に対して「そんなこと間違っている」ということを必死に訴えてきました。そのお母さんはその糾弾会にずっと参加し泣きながら見ていたそうです。そして糾弾会が終わった後、お母さんとその息子さんが家に帰ったとき、その息子さんが一言「母ちゃん、部落解放の勉強を一緒にしよう」と言ったんです。そのお母さんは、今までずっと部落から逃げていた自分や、息子が一生懸命闘っているときに、励ましの言葉を一つも掛けてやれなかつた自分が、本当に情けなく思ったそうです。それで「自分もやらないかん。部落を隠して、部落から逃げていたのではダメだ」ということに気づいて、息子さんと今いっしょに佐賀県の部落解放同盟の支部で頑張っています。今日の授業の中で「父ちゃん、母ちゃんに言ってもわかつてくれない」と言った人がいたと思うけど、「分かつてくれないから言わない」と言うのでは何も進まないし、ずっとわからないまま過ごしていくことになると思います。人を変えられるくらいの力をこれからの全体学習や学級での話し合いを通して自分自身を鍛えていって、そして「自分が闘える。今ならいける」と思ったとき、何度も何度も繰り返して父ちゃんや母ちゃんに言っていく。父ちゃんや母ちゃんだけでなく周りの人に言っていく。そういうことが一番大事なことだと思います。今日の授業、どうもありがとうございました。

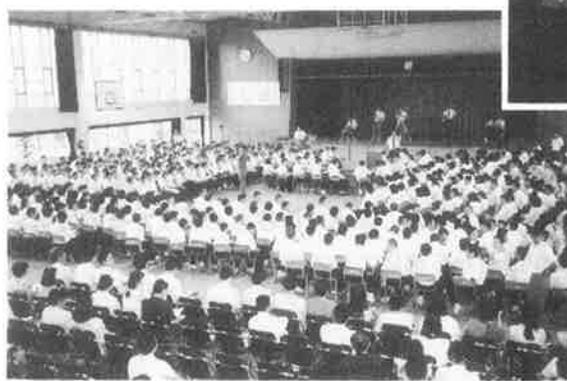
T23：みんなの姿を通して、みんなの行動を通して、お父さんお母さんを解放していく。この学習をする中で、人のことをとやかく言う生き方ではなく、自分に厳しくなっていく。自分に何ができるか。今自分は何をしなければいけないのか。常に目的を持ってその瞬間瞬間を全力で生きることができる。精一杯頑張ることができる。そういう自分にしていく。そういうみんなのキラキラ輝いた姿を通して、みんなのお父さんお母さんを変えていってください。いくら説教をしたって、いくら文句を言ったって、そんなものでは変わりません。本当にその思いをつないでいく、みんな自身の精一杯の姿や生き方をさらしていくことです。自分にできること、自分がせないかんことを確実にやっていく。自分の姿を通してみんなの頑張りを通して、みんなのお父さんお母さん、多くの仲間に応えていく。そういう頑張りをして行きましょう。だいふ超過しましたが、今日、仲間が語ってくれたこと、言いたかったこといっぱいあったらうけど、そのことをまたみんなの生きていく糧として、頑張っていきたいと思います。A組の仲間が頑張ったから、みんなですばらしい全体授業になりました。A組のみんなに拍手しましょう。（拍手）最後、みんなで心を込めて礼をして終わりたいと思います。



1994年度 全体学習のようす



1994年度 全体学習のようす



板野町学校同和教育研究会  
全体学習のようす



全体授業で発言する参観者